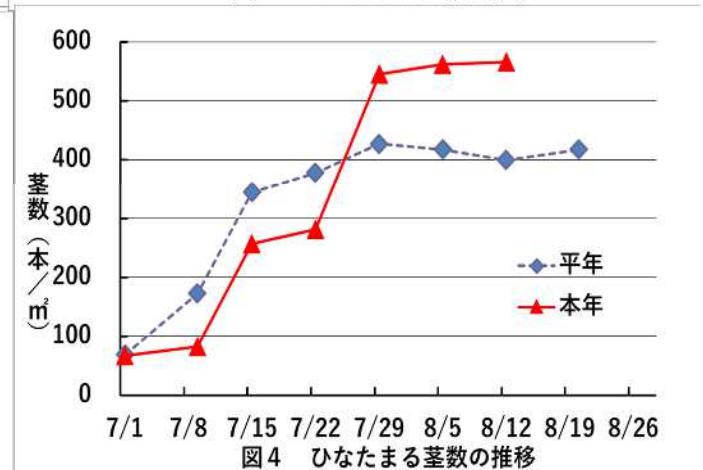
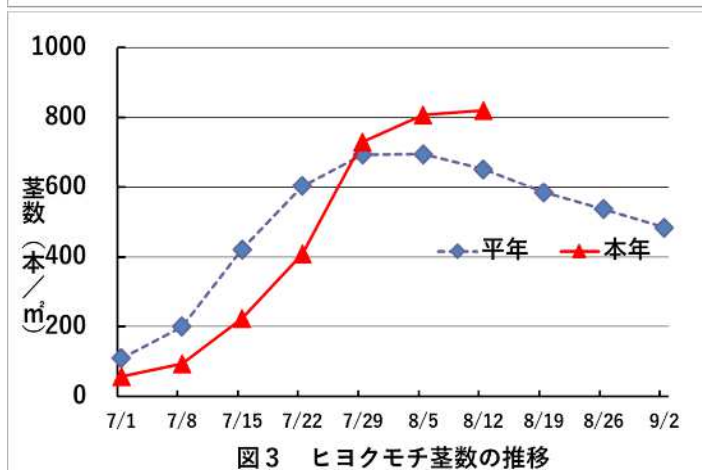
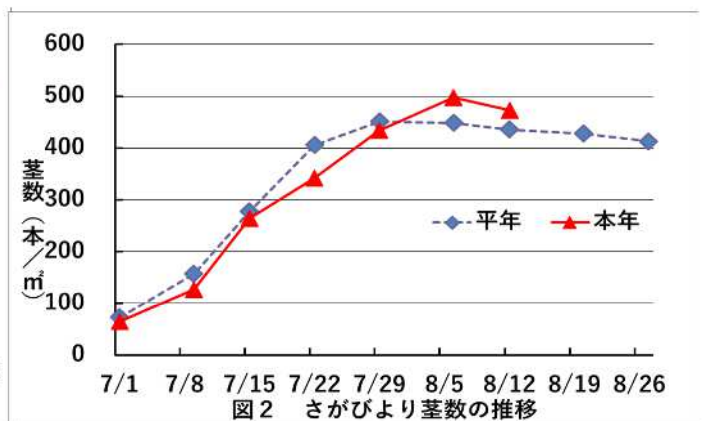
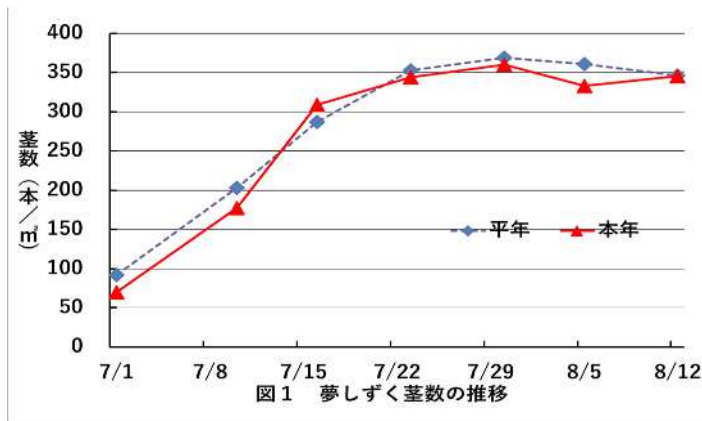


稲・大豆作情報（NO. 7）

1. 水稻作況情報田の生育概況（8月12日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本/㎡	葉 齢	SPAD	
夢しずく 佐賀市本庄町	6/16 18.7株/㎡	本 年 平 年 年 比	87.9 95.2 (92)	345 347 (100)	13.2 13.5 (-0.3)	32.0 35.8 (-3.8)	7月8日の梅雨明け以降、平年より高温・多照で経過している。 ○草丈は「夢しずく」、「さがびより」、「ひなたまる」で平年より低く、「ヒヨクモチ」では平年並み。 ○茎数は「夢しずく」では平年並み、「さがびより」「ヒヨクモチ」「ひなたまる」で平年より多い。 ○葉齢は「夢しずく」「ひなたまる」で平年よりやや遅れており、「ヒヨクモチ」で平年並み、「さがびより」で平年より遅れている。
さがびより 小城市芦刈町	6/20 19.6株/㎡	本 年 平 年 年 比	69.2 79.8 (87)	473 435 (109)	13.0 13.5 (-0.5)	34.0 35.4 (-1.4)	
ヒヨクモチ 神崎市千代田町	6/21 15.8株/㎡	本 年 平 年 年 比	75.9 74.3 (102)	821 652 (116)	13.8 13.8 (±0)	42.5 38.1 (+4.4)	
ひなたまる 佐賀市大和町	6/20 15.4株/㎡	本 年 昨年 年 比	74.0 79.8 (93)	566 399 (142)	13.4 13.7 (-0.3)	44.2 42.5 (+1.7)	

注1) 各品種 前作：麦 注2) 施肥及び病虫害防除は地区基準に準ずる
注3) 平年値は、過去10年間（H28～R7）の平均値
注4) ひなたまるはR7年から作付けのため、昨年との比較のみの記載になります。

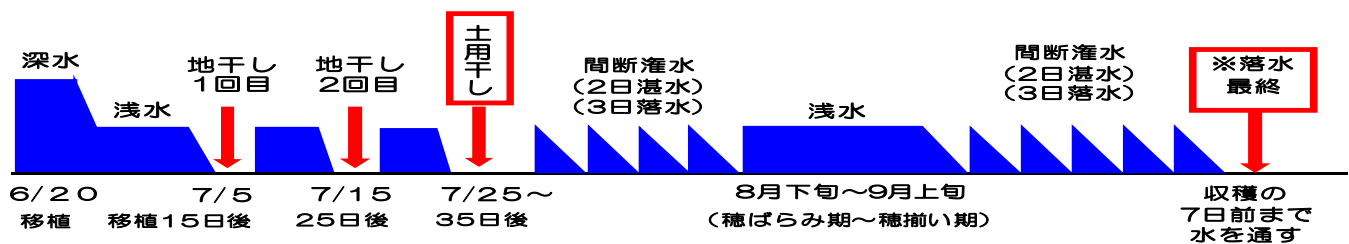


◆農業試験研究センター米づくり情報7号 8月13日(抜粋)

移植日	項目 品種	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉齢 L	葉色 SPAD	概況 (平年または平均との比較)
6月18日	夢しずく	本年	92.2	383	13.1	39.6	[気象] 8月6日～8月12日まで ◆平均気温…1.4℃高い ◆日照時間…長い(平年比 109%) ◆降水量…少ない(平年比 0%) [生育] ◆草丈 「ひなたまる」は低く、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は平年並み、「ヒヨクモチ」はやや高く、「夢しずく」は高い。 ◆茎数 「夢しずく」、「さがびより」はやや少なく、「ヒノヒカリ」は平年並み、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は多い。 ◆葉齢 「夢しずく」、「ひなたまる」はやや少なく、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ヒノヒカリ」はやや多い。 ◆葉色(SPAD 値) 「ヒヨクモチ」はやや淡く、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は平年並み、「ひなたまる」はやや濃く、「夢しずく」は濃い。
		平年	86.1	391	13.3	37.1	
		平年比(差)	107	98	(-0.2)	(+2.5)	
6月18日	ヒノヒカリ	本年	82.7	482	13.7	37.0	
		平年	82.4	483	13.4	37.2	
		平年比(差)	100	100	(+0.3)	(-0.2)	
6月19日	ひなたまる	本年	77.8	456	13.5	38.5	
		平均(2か年)	83.7	397	14.2	40.6	
		平均比(差)	93	115	(-0.7)	(-2.1)	
6月19日	さがびより	本年	79.1	458	13.5	36.0	
		平年	78.4	481	13.6	35.8	
		平年比(差)	101	95	(-0.1)	(+0.2)	
6月19日	ヒヨクモチ	本年	74.7	847	13.8	34.2	
		平年	71.9	628	13.8	35.9	
		平年比(差)	104	135	(±0)	(-1.7)	

2. 水稻における今後の管理

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～



「夢しずく」

- ・早植えの「夢しずく」(5月下旬～6月上旬移植)は、間もなく穂揃い期を、普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)は、出穂期を迎えている。出穂期以降は出穂後5日まで湛水管理とし、その後、根の活力維持及び地固めを行うため、間断灌水に移行する。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

- ・「ヒノヒカリ」「ひなたまる」は、間もなく止葉が抽出し穂ばらみ期を迎える見込みで、「さがびより」では、幼穂形成期を迎えており、「ヒヨクモチ」は、間もなく幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、「中干し」を継続している圃場では早急に入水し、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。

○各品種における幼穂形成の状況（8/12時点）

品種・場所	移植日・播種日（直播）	幼穂長（mm）
ひなたまる	6/20 移植	8.0 mm
さがびより	6/20 移植	8.0 mm
	5/25 播種（乾田直播）	7.0 mm
ヒヨクモチ	6/20 移植	未

注）振興センター展示ほにおける幼穂形成の状況を記載。

○施肥管理

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」

- ・「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は、8月7～10日頃が穂肥の施用であったと考えられる。
- ・穂肥の施用が出来ていない圃場では、穂肥診断基準（稲・大豆作情報6号参照）に基づき早急に穂肥を施用する。

「さがびより」

- ・「さがびより」は、6月20日に移植をされた圃場で、幼穂が8.0mm（8月12日現在）となっており、穂肥の施用時期となっている。
- ・施用時期は、幼穂長5～10mmが基準であり、5mmに達したのを確認し施用する。
- ・本年は、平年に比べ草丈が低く、葉色が薄い圃場が多いため「さがびより」の穂肥診断基準は、下記のとおり、県基準に準じた基準での診断とする。（平坦～山麓まで共通）

★「さがびより」の穂肥施用のポイント

- ①早くても幼穂5mmを確認してから施用する。
- ②出穂前18日（幼穂の長さ10mm）に施用。
- ③草丈が75cm以上で葉色が濃い（SPAD値37以上）場合は施用しない。
- ④草丈が75cm以下で、葉色が薄い（SPAD値33以下）場合は、2日程度早める。（出穂前22～20日に施用）

表3. 「さがびより」穂肥診断基準

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	SPAD	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
75cm以下	2.5以下	33以下	18～20日	5mm	2. 5	15.6
	3.0	33～37	18日	10mm	2. 0	12.5
	3.5	37～38	16日	15mm	1. 0	6.0
	3.8以上	39以上	施 用 し な い			
75～80cm	3.0以下	36以下	18～20日	10～15mm	1. 5	9.4
	3.0以上	37以上	施用しない			
80cm以上	施 用 し な い					

※葉色が濃い圃場や幼穂長が15mm以上になっている圃場は、穂肥は施用しない。

「ヒヨクモチ」

- ・「ヒヨクモチ」は、間もなく幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・施用時期が遅れないように表4の施肥基準を参考に穂肥を施用する。

表4. ヒヨクモチの穂肥施肥基準

	穂肥Ⅰ施用量(kg/10a)	穂肥Ⅱ施用(kg/10a)	実肥施用量(kg/10a)
施用時期の目安	8月15~17日頃 (幼穂形成始期 幼穂長1ミリ頃)	8月25~27日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月8日~10日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

※「元肥一発肥料」を施用した圃場で、穂肥Ⅰ～Ⅱの時期に葉緑素計（SPAD）で40を切る場合、窒素成分で2 kg/10a程度（BB602 15 kg/10a）施用する。大豆跡では、上記の5割未満に減肥して施用する。

○台風対策（台風の接近が懸念される場合の事前及び事後対策）

- ・台風接近時 → ①いずれの品種も、茎葉の繁茂度が高く、水分の蒸散量が著しい時期であるため、必ず深水・湛水を行う。
②出穂している圃場では、強風による稔実阻害（不稔、白穂などの発生）や登熟阻害（粃ズレにより病気や雑菌の感染）が懸念されるため、深水管理とし稲体の振動を少なくする。
- ・台風通過後 → ①茎葉の損傷により根の老化が進むことがあるので、台風通過後は必ず新しい水と入れ替えて、こまめに間断灌水を行い、根の機能維持・生育回復に努める。
②水田に海水流入による浸冠水や潮風害を受けた場合は、直ちに排水し真水と入れ替える。できれば掛け流しを行って除塩するか、少なくとも2~3回は水を入れ替え、生育回復に努める。
③台風通過後は受光体制が乱れ、ウンカや白葉枯れ病等が発生しやすくなるため、トビイロウンカの発生には十分注意し、場合により薬剤防除を検討する。

○病害虫情報（発生および防除）

- ・今後も高温が続く見込みであり、高温・少雨の条件下では害虫の発生が多くなるため、発生状況を確認し、適期防除を実施する。
- ・セジロウンカとトビイロウンカは、6月3日頃～飛来しており、6月20日～7月6日、7月16～20日頃に主要な飛来が確認されている。（トビイロウンカ：7/1～7/6の飛来が約8割）
- ・本年は飛来が断続的に認められ、飛来量も多いため、今後の発生に十分注意する。
- ・発生状況は、田植え時期や品種及び地域によって異なるので、発生予測図（図1）を参考に、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。
- ・コブノメイガは、6月20日頃及び6月26日頃に飛来が確認されている。
- ・地域により幼虫の食害が多いため、今後の発生に注意する。止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、発生予測図（図2）を参考に、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで幼虫ふ化揃い期（発蛾最盛期の7日後）に防除を実施する
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45 - 8153 FAX (0952)45 - 5085
Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp



トビイロウンカ防除適期
1回目 8/20～8/24
2回目 9/18～9/24

コブノメイガ防除適期
1回目 8/8～8/22
2回目 9/11～9/26

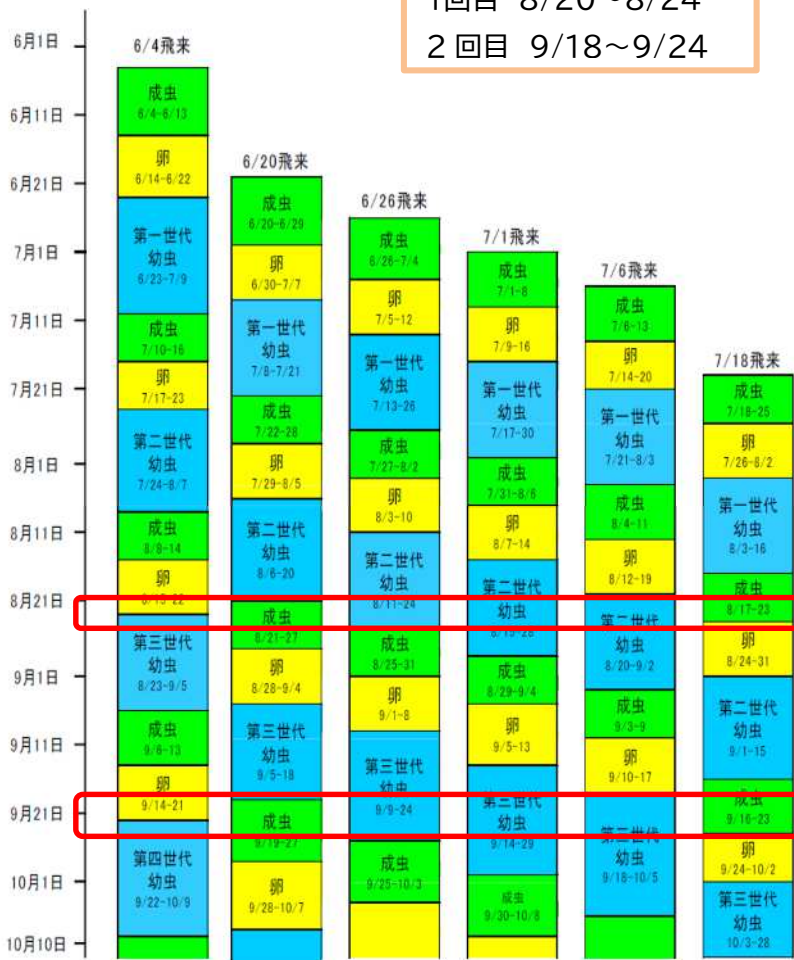


図1 トビイロウンカ各世代の発生予測 (第2版、2026年7月26日作成)



図2 コブノメイガ各世代の発生予測 (第2版、2026年7月26日作成)

【斑点米カメムシ類】

- ・今年度は斑点米カメムシの発生が平年より多く、R8年7月 29 日付けで早植え及び普通期水稻を対象とした注意報が発令された。管内でも多発生圃場が散見されており、8 月 6 日発表の九州北部地方の 1 か月予報 (8/8～9/7) では、今後 1 か月程度も、暖かい空気に覆われやすいため気温の高い状態が続く見込みとされており、多発生条件となっている。
- ・出穂後の除草は、水田に斑点米カメムシ類を誘い込み被害に繋がるため、普通期水稻においても発生状況を十分確認し、水稻周辺の畦畔、休耕田、空き地等の除草を 出穂 10 日前までに実施する。
- ・なお、発生が多い場合は、穂揃い期および 乳熟期 (穂揃い期の約 10 日後) の 2 回防除を実施する。
- ・防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

表5. 各品種別の草刈り時期の目安

品種名	出穂期（平年）	出穂10日前
ヒノヒカリ・ひなたまる	8/27	～8/17頃まで
さがびより	8/30	～8/20頃まで
ヒヨクモチ	9/10	～8/31頃まで

注1）出穂期（平年）は、佐城管内における情報田のデータの平均値

注2）夢しずくは、例年8/16頃出穂期を迎えるため既に草刈りの時期を過ぎています。

◆農業技術防除センター病害虫発生予察注意報第4号 7月29日（抜粋）

1. 注意報の内容

発生地域：早植え及び普通期水稻栽培地域

発生量：平年より多い

1) イネ科雑草地での発生状況

7月15～21日に行ったイネ科雑草におけるすくい取り調査（18地点）では、クモヘリカメムシの成虫・幼虫ともに平年より多く、ホソハリカメムシの成虫は平年よりやや多く、幼虫は平年より多かった（表1）。これらは斑点米を生じやすい種であり、幼虫の発生も多いことから、今後も発生が多く推移すると考えられる。

表1 イネ科雑草における斑点米カメムシ類のすくい取り調査結果（7月後半調査）

	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		アカシガシカメ		シラホシカメムシ類		ミミズカメムシ	イネカメムシ	
	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	成虫	幼虫
本年（R8）	15.2	11.0	2.6	1.4	0.3	0.1	8.8	6.7	0.06	0.3	0
平年比	多	多	やや多	多	並	やや少	やや少	並	並	多	並
平年	2.9	3.0	1.9	0.5	0.2	0.5	13.3	7.6	0.03	0.02	0
前年（R7）	1.7	0.6	4.1	0.1	0.1	0.6	14.2	8.6	0.2	0.2	0

注）表中の数値は、すくい取り調査（捕虫網20回振り）における地点当たりの平均捕獲虫数。

平年値は過去10年（H28～R7）の平均値。

【イネカメムシ】

- ・イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種で、昨年から佐城管内でも確認されている。
- ・本種は、水稻の出穂始めに糞を吸汁して不稔にし、大きな減収被害が生じる。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となる。

(防除対策)

- 1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。
- 2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。



写真1 斑点米カメムシ(左：イネカメムシ、右：クモヘリカメムシ) 写真2 イネカメムシの成虫(左)及び幼虫(右)

【紋枯病】

- ・九州北部地方の1か月予報(8/8～9/7)では、気温の高い状態が続く見込みのため、多発生条件となっており、一部圃場で発生を確認している。
- ・近年、多発傾向であり、高温多湿条件が続くと、紋枯れ病が進展する恐れが高まるので、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展(垂直進展)する時期に防除を徹底する。
(液剤、粉剤の場合は出穂10～20日前を目安とする)
- ・病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。



写真3 ひなたまる (R6年8月)

※「ひなたまる」は紋枯病に弱く、紋枯病が多発し倒伏した事例もあるため、基幹防除を徹底する。

3.大豆における今後の管理

1 大豆の生育状

- ・7月上中旬に播種された圃場では、8～9葉期（写真5）、7月下旬に播種された圃場では、5～6葉期となっている。（写真6）
- ・7月下旬に播種された圃場の一部では、高温乾燥により、萎凋し始めている圃場が散見される。



写真5 7月10日播種生育状況（8/13撮影）



写真6 7月21日播種生育状況（8/12撮影）

2 今後の管理

1) 中耕・培土の実施

- ・7月下旬播種：まもなく2回目の培土の時期を迎える。本葉が5枚開いているのを確認したら初生葉（子葉の上の葉）が隠れる程度まで培土を行う。

※ただし、本年は梅雨明け以降、降雨がほとんど無く土壌は過乾燥となっている。
極端な乾燥条件での中耕・培土は避け、雑草防除が必要な場合のみごく浅く中耕を行う。

【高温・干ばつ時の中耕・培土の注意点】

1. 開花期近くの中耕・・・×

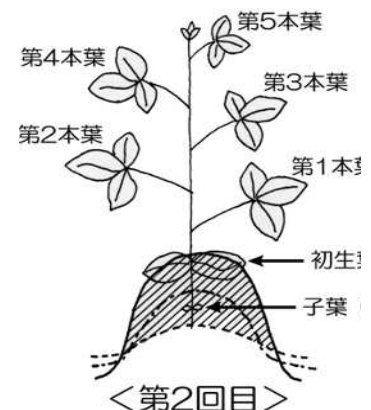
うね間に張り出した根量が多く、大豆へのダメージが大きい。

2. 日中、高温時の作業・・・×

断根に加え、大豆の蒸散量が大きく、ダメージが大きい。

3. 株元まで土がかかっていない・・・×

培土の目的である不定根の発生、根粒菌の活性化、倒伏軽減が不十分。



2) 干ばつ対策について（降雨が見込めない状況の場合）

○高温乾燥が予測される場合の対策

- ・コルゲート管の閉栓が土壌水分確保に有効である。

◆大豆生育期間中に必要な水量



3) 播種後対策

- ・播種深度が想定より浅く種子周辺の土壌が乾燥している場合や、大豆の草冠が夜間も立っていたり、委縮している圃場（写真8）では、今後も高温・乾燥が予想されるため、速やかに畝間へ灌水しその後、速やかな排水を行う。

なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。
※畝間灌水後は雑草の発生が多くなるため、除草剤散布等の雑草対策を行う。



写真8 乾燥で萎縮した大豆（R7年産）

4) 病虫害対策について（発生及び防除）

①【ハスモンヨトウ】→白変葉が発生

- ・管内でもハスモンヨトウの発生が確認されており、一部の地域ではフェロモントラップによる捕殺数が増加している。
- ・夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されるため、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意する。
- ・播種期が早い圃場では、例年8月中旬頃からハスモンヨトウの幼虫が散見され始める。
- ・防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中令幼虫以上（体長約2cm以上）になると、防除効果が低下する。
- ・防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要である。
- ・ハスモンヨトウには、フェニックスフロアブル、プレバソンフロアブルは感受性が低下しており、使用を避ける。

②【オオタバコガ・ウワバ類】→ 葉っぱに穴が開く

- ・気象予報では高温少雨が予測され、ハスモンヨトウと同様に多発生の条件となっている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高くウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。
- ・オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボンに感受性が低下しており、使用を避ける。

表6. 防除薬剤（効果が高い薬剤）

	ハスモンヨトウ	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ
薬剤名	ブロフレア、グレーシア、プレオ、ディアナ等	ブロフレア、グレーシア、プレオ、等



ハスモンヨトウ

オオタバコガ

シロイチモジヨトウ

◆農業技術防除センター病害虫対策資料第11号 8月8日(抜粋)

オオタバコガ、シロイチモジヨトウの防除対策の徹底について

大豆において、8月上旬に一部圃場でオオタバコガの多発圃場を認めています。また、オオタバコガおよびシロイチモジヨトウのフェロモントラップ調査において、誘殺数が平年に比べて多く推移しています。今後、大豆、野菜類、花き類でこれらチョウ目害虫による被害を生じるおそれがあります。

1. オオタバコガ、シロイチモジヨトウの発生状況

- 1) 8月1日～5日に行った大豆の定期調査において、一部圃場でオオタバコガ及びシロイチモジヨトウの寄生を認めている。
- 2) オオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数は7月6半旬に増加し、平年より多い(図1)。
- 3) シロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数は、平年より多い(図2)。

2. 防除対策

- 1) 発生状況は圃場ごとに大きく異なるため、必ず圃場を確認し、幼虫の発生を認めた場合は早急に防除対策を行う。
- 2) 発生している種によって薬剤の効果が異なるため、薬剤の選定には注意し、散布後は効果を確認する。
- 3) 幼虫は、齢が進むと薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫期に防除を行う。
- 4) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- 5) 圃場周辺の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。

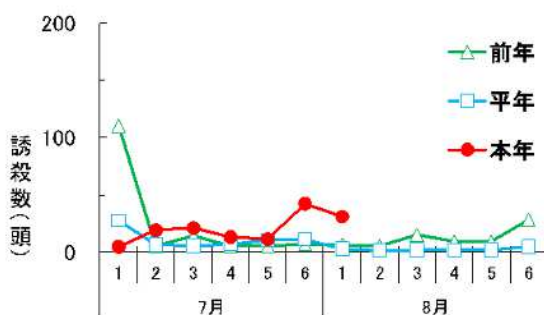


図1 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(佐賀市川副町・農業試験研究センター調査)

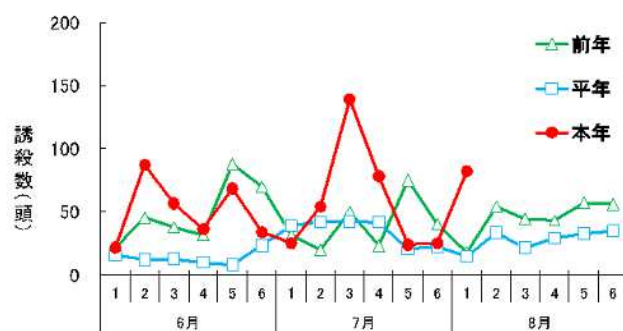


図2 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半旬別誘殺数
(佐賀市川副町・農業試験研究センター調査)

5) 雑草防除

(1) 難防除雑草への対応

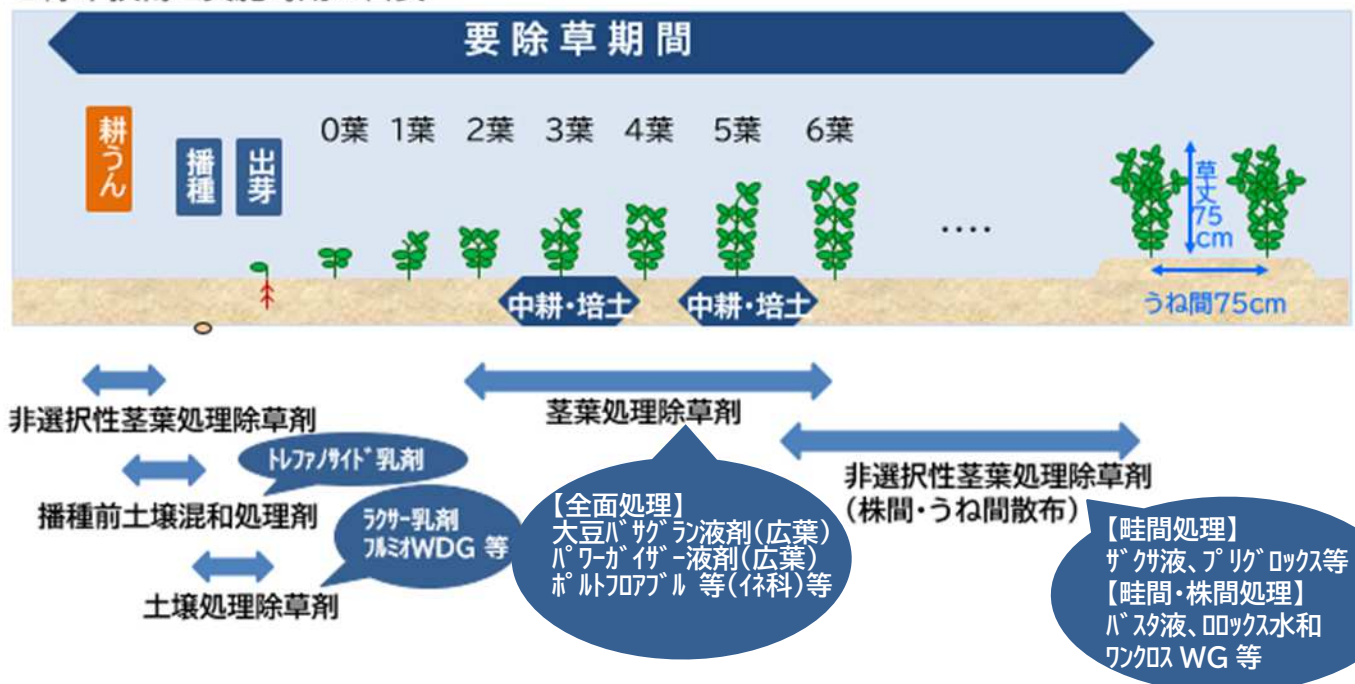
アサガオ類やホオズキ類が圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため、発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。

ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

播種前		播種直後	2葉期 ～開花期	生育期
基本体系		ラクサー 等		
播種前に雑草が多い場合	ラウンドアップ マックスロード、 プリグロックスL 等			
ホオズキ類 多発圃場	※	ラクサー、 フルミオWDG		ラウンドアップマックスロード、バスタ、プリグロックスL（うね間処理、バスタは株間処理も登録）
アサガオ類 多発圃場	※	フルミオWDG +ラクサー	大豆バサグラン	
ツユクサ類 多発圃場	プリグロックスL 等	（慣行剤）		プリグロックスL（うね間処理）

※ 必要に応じて散布

■ 除草技術と実施時期の目安



令和8年産水稻・大豆生育期間気象グラフ（アメダス：佐賀）

佐城農業振興センター

